慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 『モールドンの戦』の歌<第一部> : その史的背景と詩人の内面 |
| Sub Title | The battle of Maldon : A historical background and the poet's purpose |
| Author | 小田, 卓爾(Oda, Takuji) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1970 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.28, (1970. 2) ,p.126(23)- 148(1) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00280001-0148 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『モールドンの戦』の歌

## 〈第一部〉

## ——その史的背景と詩人の内面——

小田卓爾

***'Ac onwacnigeaðnu, wigend mine,***
***habbaðeowre linda, hicgeapon ellen,***
***winnaðon orde, wesaðon mode!'***

〔ぷりあむぶる〕

かつて顕学W.P.ケアはその名著『中世英文学史』に於て，一般に『モオルドンの戦』と称される古代英語詩について，そこでは「英雄精神がおよそ完全に具現されている」と述べ，「古くからある叙事詩の形態を保存している詩篇」と呼んでおります。また，この作品の著名な校訂者E.V.ゴードンは「現存する古代英語詩中，唯一の純然たる英雄詩」と断定しました。迫り来る敗戦の時を前にして，勇気増々逸る武士達の勇壮を描いた歌，つまり英雄叙事詩だと言うのであります。仮にこうした見解を「伝統的」と呼んでみますと，伝統的見解は依然として存続し，最近ではむしろ再認識されていると言えるでしょう。g.E.クロスやM.g.スウォントンなどの見解はそうであります。

しかし近年，この作品に関して様々な考察がなされていることは周知の通りであります。例えば，g.B.ベシンジァは，歴史上の具体的事件を素材としながら，史実にこだわらずに描いた詩と考え，またB.F.イペやM.W.ブルームフィールドは，宗教的もしくは道徳的視点に立脚して，歴史的，英雄詩的見解いわば伝統的見解を否定しております。更には，詩人のアティスティクな面に注目するR.W.V.エリオットのような立場や，精神的葛藤の詩とする見地，そして純粋にイマジネィションの所産だとして，

制作年度を数世紀後に求めたりするなど，この分野の研究も多様性を帯びて来たと言えましょう。[1]

こうした諸見解のどれか一つに固守するだけのことなら，それ程困難な仕事ではありますまい。しかし私は，『モオルドンの戦』に関する一連の研究を始めるに際して，先ず歴史的研究の立場をむしろ意識的にとって，その出発点としてみました。古い文学を考察する場合，その歴史的背景を把握して作品に迫ることは，方法論の一つとして極く常識とも言えるからです。そしてこの作品の場合，年度が明確な歴史上の事件を題材としているのですから，当時の史的背景を探ることは避けられない課題でありましょう。その妥当性については，論議より，むしろ調査結果に待つべきであります。この方法は同時に，研究史を時代に沿って自分の眼で追跡することにもなりますので，「正統」とも言えるのではないでしょうか。

扨て，私は以上のような方法論の下で，先ず『ブルナンブルフの戦』の異色の光を，『モオルドンの戦』の側面から照射し，補色的効果を期待しながら，議論を起こして行きたいと思います。

## I.

（1） イギリス史に於ける紀元千年の周辺，それは比類なき恥辱の記録である。人々は内に王の悪政を忍び，外からは異教の徒デイン人の侵寇で震駭の日々を過していた。その頃，アルフレッド大王のあの英知と栄光は，既に歴史の舞台からは姿を消していた——。

アルフレッド以後，即ち古代英語後期に，史実によった戦争詩が二篇現存している。『ブルナンブルフの戦』と『モオルドンの戦』[2]である。『ブルナンブルフの戦』は『アングロ＝サクソン年代記』九三七年の記事として挿入されたロング＝ラインにして七十三行のものである——エドワード王の子エセルスタン王とエドマンド王子は，アーンラーフ麾下のダブリンから来寇したデイン人及びコンスタンチヌス二世率いるところのスコットランド人の軍勢をブルナンブルフ[3]に迎え，これを撃破した。作者は二人の武勲と，彼らが率いたウエスト＝サクソン人とマーシャ人の健闘を讃え，デ

イン人とスコットランド人の潰走を嘲笑する。取分け，エセルスタンに背信したコンスタンチヌスの鄙劣さには，辛辣な皮肉を浴せている。

『ブルナンブルフの戦』が勝利の歌であるのに対し，『モオルドンの戦』は敗戦の歌である。冒頭と末尾を欠く断片六葉，ロング＝ラインにして三二五行のこの詩は，写本コットン・オトー A. XII. に蔵されていたが，一七三二年コットン書庫に起きた火災で焼失した。しかし，その火災の五年前，考古家トマス・ハーンは一七二六年オクスフォードで出版したジョン・オブ・グラストンベリの年代記の附録の中に，この詩を転写したものを附け加えて置いた。更にはハーンのテクストのもとになったジョン・エルフィンストンの転写も発見され，幸いにして今日我々の前にその姿を留めることになった。[4] 前後を失いながら，この詩は事件の進行が二つに分れ，[5] 作品としての体裁を整えている。初めにその基点を押えながら概略を述べておく——

> 九九一年のこと，デイン人[6]の大軍がモオルドンに侵入した。太守ビュルフトノォスは直ちに臣下を集め，パント河を挾んで応戦の構えをとった。先ずデイン人の使者が平和と引換えに黄金の貢を要求した時，彼は毅然としてこれを拒絶し，激戦の火蓋は切って落された。橋[7]を守る三人の勇者を手強しとみるや，海賊は奸計を廻らし激しく攻め込んで来た。ビュルフトノォスとその臣下らは善戦するが，太守はデイン人の放つ槍に傷度重なり，遂に数人の敵の刃の前に斃れる。主君の死を目撃するや，オッダの子ゴドリクは繋いであった主君の馬に跳び乗り，その兄弟とともに逃亡した。だが主君の恩情忘れぬ臣下らは，主君の仇を討たんと敗戦と死を覚悟の上で敢然と敵に立向い，軈て力尽きて一人一人戦場に屍を並べてゆく……。

（2） ブルナンブルフでの勝者エセルスタン王は名王アルフレッドを祖父に持ち，更には父王エドワードの善政を受け継ぎ，アングロ＝サクソン王中最も聡明なる王として全ヨーロッパにその名を轟かせた。この戦は彼にウェスト＝サクソンとマーシャの王としてのみならず，ノーサムブリアに至るまで全イングランドの王たる地位を約束したのである。それは政治的，国家的に意義深い勝利だった。デイン人抑圧にともかく成功したのは，言うまでもなくアルフレッド大王であったが，世紀が移りエセルスタン治世になると，あるスカンジナヴィアの歌人は彼を称え「雄々しきエセ

ルスタン」と歌っていた。[8]

それから時旧ること半世紀，イギリスは血と暗黒の歴史を歩み始めるのである。九七八年，エドカー平和王の子エドワード王はドーセットシャのコーフに於て惨殺され，その異母弟エセルレッドが王位に就いた。エセルレッド怠惰王の呼称が示す如く，この王の在位三十七年間と言うもの，イギリスの民は艱難の憂目をみ続けねばならなかった。九七九年，『アングロ＝サクソン年代記（C）』の筆者はエセルレッド即位を略述した後で，「これと同じ年，火に似たる血色の雲屢々現われぬ。夜半には，最も著しく現われて，様々なる光の筋の姿となりぬ。夜明けむとするに到りて消え失す」と述べ，また『年代記（B）』では，エドワード王殺害とエセルレッド即位の記事の間に長短二十四行からなる韻律不規則のバラッドが挿入され，ブリテン島移住後このような悪事はなかったこと，王の血族は復讐を果さなかったが，天帝が彼の仇を報じたことが歌われている。これらは当時の不隠な国情を各々の視点から感じとったものであろう。折しも十世紀末は，紀元千年に「此の世の終り」を迎えるという思想が流布し，人心は不安の余りひどく動揺していた。九七一年頃に書かれた『ブリクリン説教集』は最後の審判の日に現われる徴候の一つとして，血色の雲が北方の空から昇ることを挙げ，また「此の世の終り」が近いことを頻りに説いて世人を戒めている。血塗られたエドワード殺害に続くエセルレッドの治世，火に似たる血色の雲の出没，そして「此の世の終り」と考えて来ると，『年代記』を書いたアビングトンの一僧侶が単なる天然現象を殊更深刻にとらえ，不安に怯えた筆致でそれを記録した胸騒ぎも，またその世相を神の怒り及んだ時代と考え，あのバラッドを口遊んだ民衆の心をも多分に想像し得るはずである。[9] 元来，この終末思想は「ヨハネ黙示録」の比喩を神学者達が誤解したことに端を発しているのであるが，[10] 事実，大飢饉と騒動（九七六年），ロンドン大火（九八二），王のロチェスター包囲，熱病と家畜の伝染病（九八六）など，その思想に信憑性を添えるに足る惨事が後を絶たなかった。しかし，人々を最も恐怖の底に陥れたのは，北海を渡って襲来する精悍なデイン人の群であった。九八一年，エセルレッド即位二年目に

七隻の船がサザンプトンを襲った。海賊侵入の激しさが増す一方，悪政の治下で疲弊の極みを忍んでいたイギリス人には，勇猛果敢に攻め寄せる彼らに対し，断固抵抗する者とてなく，ただ破壊と掠奪の前に怯えるばかりであった。九九一年，遂にエセルレッド王はカンタベリ大僧正の忠言を入れて一万ポンドを支払って和を請う屈辱の政策に出た。[11] 当時の『アングロ＝サクソン年代記』は，デイン人に弄ばれ荒廃への道を急ぐイングランドの悽惨な光景を相次いで伝えている。

異教の徒デイン人の襲来がその熾烈を極めた頃，ウスター司教を兼ねたヨークの大司教にルプスという者がいた。彼の説教文の中に『エゼルレェド王御代のこと，デイン人等が最も甚しくイギリス人を迫害したるとき，イギリス人に与えたるルプスの言葉』[12] というものがある。モオルドンの戦から二十一年後の一〇一二年の作であるが，冒頭から此の世の終末，反キリストの出現が近づき，イギリスの情勢はひたすら悪化の一途を辿っていると，悲憤を込めて語り出している。火災，悪疫，騒動，飢饉そして様々な精神的，道徳的頽廃堕落と賊勢猖獗など，当時の病根を総て剔出して痛烈に非難する。勿論，信仰心は人心から去り，教会と国家に対する裏切行為が続発する。数限りない悪徳の当然の報いとして神の怒りに触れる。神の裁きのあらわれがデイン人襲来だと言う。ここで注目すべきことは，海賊デイン人に対し，当時のイギリス武人や王，貴族がとった卑屈な態度を糾弾している点である。「今や永らく内にも外にも何等よき事とてはなく，凡ゆる方面に戦と迫害，繁く頻りに起りぬ。而して今や永らくイギリス人等は全く勝を得しことなし。神の怒りによりて甚だしく意気を挫かれ，而も海賊等は神の賛同によりて甚だしく強きため，屢々戦に際し一人（のデイン人）よく十人（のイギリス人）を敗走せしむることあり。時にはそれより多きことあり。遍へに，我等（イギリス人）の罪業によりてなり。」彼は異教徒デイン人を悪の対象としては考えていない。またイギリス武人は無下なる恥辱を受けた時ですら，「されどそのこと起るまで，己をして勇猛かつ膂力強き剛の者と任ぜし彼，ただ傍観するのみ」であった。更に金で和を請う恥辱を慨嘆しこう言う——「然れども我等が屢々被る此の侮り

に報ゆるに，我等は辱しむる者に対する尊敬を以てす。我等は常に支払いをなし，彼等は日々我等に辱しめを与ふ。彼等は破壊し，焼き，掠奪し，押収して船へ運ぶ」と。ルプスの言葉が如何に真実であったか，それは『アングロ＝サクソン年代記』の呻吟にも似た記事が証明するところである。

扨て，九九一年，打ち続く敗戦の中で，エセックスの一角に矢張り一つの敗戦があった。『年代記（B）』はこう伝えている[13]——「この年ユペスウィチ（イプスウィチ）は掠奪せられ，而て其後まことに幾何もなくメルドゥン（モオルドン）にて太守ブリフトノォスは殺害せられたりき。而してこの年デイン人等に，彼等が海辺にてなしける大いなる恐しき業の故に，最初の貢を支払うことと定めぬ。こはその切め一万磅なりき。此提言は最切大僧正シュリク（シイェリク）がなしけるものなり。」奇しくもあの屈辱の政策をとった年であった。この一人の太守ビュルフトノォスの死を歌ったのが『モオルドンの戦』である。先に概略で示した通り，この詩に描かれている敗北は，当時のイギリス武人階級の怯懦がなせるものとは凡そ質を異にし，アルフレッド時代のイギリス武人の気慨，また『ベーオウルフ』や『フィンズブルフの戦』に歌われた英雄精神，更に遡っては，コルネーリウス・タキトスが『ゲルマーニア』で描いた古代ゲルマン武人の息吹を生々しく伝えているのである。精神の堕落，とりわけ武人階級の失態著しい歴史を背にしてこの一沫の作品を考える時，我々はそこに漂うある深遠な精神に触れずには済まされない。

（3） 十世紀前半も進み，デイン人侵寇が小康を保っていた頃，イギリスに於いてもデイン人による破壊や教会の世俗化の故に，聖ベネディクトの厳格な規律を遵守し，修道院を本来の姿に戻そうとする動きが，ダンスタンとその同僚を中心に起った。それは同時に学問再興にも直結し，あのビード時代に開花した文化と比肩し得る精神の活気が満ち始めたのである。軈て十世紀末に近づく頃，例のエセルレッド王時代の激動と頽廃が蔓延した世相にあっても，修道院の中では依然として学問の灯が輝いていた。エセルウォルド，エルフリック，オズウォルド，そしてあの激文を吐

露したルプスまたの名をウルフスタンなど，当時の学者・高僧の名を挙げることはたやすい。文学についてみれば，伝統的表現法を用いた古代英語詩への嗜好が宮廷や教会の好古家の間で再び萌芽した。当然古い英詩の保存に力が入り，千年の歴史を掻潜って永らえたあの四つの写本もそのあらわれであった。香気失せた『年代記』に，顕著な事件を詩に歌い記事として挿入したのもその頃である。[14]

『ブルナンブルフの戦』は正しくその所産であった。『モオルドンの戦』とは共に同世紀に起きた戦争を題材とし，古代英語詩の持つ伝統的詩形とスタイルに則って書かれている。双方の作者が古代英語詩に通暁した者であることは最早疑いない。しかし，前者は事件の目撃者によるものではないと推察され[15]，また後者については，その詩人は恰も目撃者の如き忠実さで描いたと言及されることが屢々である。作品から受ける感動の差異を，作者の詩作態度の観点から見ればそう言える。

ブルナンブルフでの勝利は，全イングランドの支配権を確保したエセルスタン治世最大の事件であった。作者は『年代記』の記事として，好古趣味を充たすに足る伝統的表現法を駆使し，その大勝利を讃美する必要があったのであるる。事件を全体からとらえ，二人の英雄の他は臣下の名さえ語らず，専ら二人の武勲とイギリスの勝利を称え，敵軍の敗北とその指揮者の失態ぶりを愚弄する。これは敵軍の指揮者の名さえ挙げ得ず，ひたすらビュルフトノォスとその臣下二十人以上もの名を連ね，数々の武勲と武人の内面を描くことに終始した『モオルドンの戦』の詩人とは全く逆の行き方である。常套的語句・表現法，スティキックな文体，古色蒼然とした頭韻詩法など，『ブルナンブルフの戦』は古き古代英語詩を増々髣髴させて止まない。こうした古風な詩文を用い，作者は愛国的パニジリックを詠んだのであった。これを傍に置いて対比を試みると，『モオルドンの戦』の姿がその輪郭を更に明瞭に現わして来るのである。

他の古代英語詩の多くがそうであるように，『モオルドンの戦』の場合も「よみびとしらず」である。ビュルフトノォスはエドマンド王と姻族関係にあるエルフレェドを妻とし，甥のエゼルウィネとともに教会改革に協

力したことから，国家と教会の熱心な守護者であった。この詩人も彼の傘下にいた門地ある人物で，その敗戦の記憶いまだ人々の脳裏を冷めやらぬ頃，近しかったビュルフトノォスとその臣下達の死を記念して詩に遺したと推測されることが屢々である。「夫の武勲を綴錦に織り込んだ遺されし妻エルフレェドにも似た心を込めて」とゴードンは言う。[16] 確かに，このような見解には議論の余地がある。しかし，彼が国家紊乱の歴史の舞台裏で密かに学問の灯を点し続けた一人であり，そして彼の背には，あの血と暗黒の歴史が重々しく伸掛っていたとする仮定は，何ら考察なく放擲し得ることだろうか。ブルナンブルフでの戦と比べれば，国家的意義の遙に劣るこの事件を，現存する部分だけでも数倍にも増して長い詩を制作するに際して，彼は如何なる詩作意図を抱懐していたか。我々は先ず，できるだけ詩人の内面に接近して取掛かる必要がある。

## II.

コルネーリウス・タキトスは，その『ゲルマーニア』に於て次の如く述べている：——「……，（ゲルマン人は）統率者を選ぶのにその勇敢さをもってする。……，統率者もまた権力によってではなく，自ら人に範たるを示すことにより，勇敢に，かつ群を抽んで，前戦にて戦ってこそ人の称讃を呼び，人々を統率することができる（同書，七）」，——「戦場に臨んだ時，主君にとって勇猛さに於て凌がれるは恥辱であり，臣下にとって主君の勇猛さに及ばぬは恥辱である。更に己れの主君より命存らえて戦場を背にしたとなれば終生の不名誉であり，かつ恥辱である。主君を防護し，自らの立派な手柄さえ主君の栄誉へ帰することこそ忠誠の最たる誓いである。主君は勝利のために戦い，臣下は主君のために戦う（同書，十四）。」

アングロ＝サクソン人は移住後も，大陸時代の古代ゲルマン社会を支える三つの精神的原則——血族関係，コミタートスの精神，自由人の原則——を受け継いでいた。[17] 粗方の初期共同体同様，古代ゲルマン社会に於ても最大の絆は血族関係であったが，軈て忠誠によって結ばれた主君と臣下の関係が成長して行った。この臣下の主君への忠誠が，正しく古代ゲルマ

ン武人社会の倫理的規範であり，キリスト教移入後のイギリス武人の間にも，久しく脈打ち続けていたのである。アングロ＝サクソンのスコォプ達はその武人精神を歌い上げ，屡々キリスト教を主題とした宗教文学にさえその発現を見る程であった。

（2） 此処でこの古代ゲルマン武人精神を念頭に置きながら，武将ビュルフトノォス像について考えておかなければならない。

各種の『アングロ＝サクソン年代記』の他に，モオルドンの戦とビュルフトノォスに関する幾つかの記録[18]がある。『聖オズワルド伝』，『ラムジ史』，『エリ教会史』である。『聖オズワルド伝』はモオルドンの戦から年幾許も隔てずして書かれ，『年代記』の記事に確証を添えるものである。「残念ながら，この華麗な文章にも，『年代記』で知れることの他に付添えるものはない[19]」とセッジフッールドは述べているが，この戦を事件としてとらえるのではなく，武将ビュルフトノォスに光を当ててみると，そこには姿形堂々とし，戦場に於いて勇猛果敢，臣下に対し気高き言葉をもって激励し，敬神の念を抱いている等々，事件を記事としてとらえた『年代記』にはみられない，豊かなビュルフトノォスの姿が描かれていることに気付くのである。尤も「ビュルフトノォスは斃れ，残れし者らは逃れぬ。デイン人は莫大なる損害を蒙り，命存えるもの甚だ数少く，船に乗組むこと適わず」と，ビュルフトノォスにとっては苛酷な描き方や『年代記』とは相入れない記述もあり，また十二世紀後葉に書かれた他の二史書は特に修道僧的作為偏見が多く，資料としての信頼度は極めて低い。しかし，これらに共通して描かれた武勇に秀で，信仰心篤い武将ビュルフトノォスを，単に虚像と看做すことはできない。彼のそうした勇姿は，世紀を隔てた者の記憶からも消え失せてはいなかったのである。当時『モオルドンの戦』に触れた人々の心には，それが鮮かに刻まれていた筈である。それでは『モオルドンの戦』に於てはどうであったか。

現存する三二五行の中で，ビュルフトノォスは二度岐路に差掛かる。概略中の下線部が示す通り，最初はデイン人の使者が平和と引換えに黄金の貢物を要求して来た時である。彼は言下にこれを拒否した。「汝等にはさ

まで易々と宝を贏ち得させまじ。我等貢を払わむより前に槍先と刃，烈しき戦先づ我等が仲を治めざるべからず。」貢物をもって和を請うは，ゲルマン武人にとっては無下なる屈辱であった。斯く誇り高き彼は「うけばりたる心の故に」敵の奸計を許し，敗戦への道を歩むのである。だが戦に際し，白髪の彼は勇敢に前戦にて戦い，開戦から定命尽きる瞬間まで臣下を激励し，命令し続けることを忘れなかった——「ビュルフトノォスは彼等を励まし，武士ら何れもデネ（デイン人）にあたりて誉をかち得むと思はむ者は戦に心せよと命じぬ。」ここで，『ゲルマーニア（七），（十四）』で述べられた統率者たるの条件を一つ一つ，彼の言動に照合してみると，合致しないものは全く見当らないことに気付くであろう。彼には，古代ゲルマン武人の武将たる気魄が満々と漲っていたのである。

ところで，ビュルフトノォス像について注意すべきことがある。彼が信仰心を抱く武将であることである。彼は戦の勝敗を神に委ね，邪宗の敵を切り倒した時も神に礼を述べた。今や死に臨んで，彼は天の方を眺め「人々を統べ給う君（神）よ。我は，此世にて我が享けしあらゆるかの歓びに対し謝し奉る。……」と神への感謝を表わす。『モオルドンの戦』は勿論キリスト教を題材としたものではない。これは，他の古代英語詩の英雄と同じく，キリスト教思想によって修整されたゲルマン武人の思想である。[20] 更には，主君ビュルフトノォスは同時に時の王エセルレッドの臣下でもあった。彼は自らを「此国，エゼルレェドの国，我が主君の民と土地を護らむとする誉高き太守」と呼んでいた。

斯くして，勇敢にして武勇に優れ，人に範たるゲルマン武人精神，そして，忠誠と敬神の念を忘れぬ武将，ビュルフトノォスの姿が浮び上って来るのである。

（3） ビュルフトノォスは斃れた。それ以後は臣下達が主君亡き後，戦場に於て如何に考え，如何なる行動をとったかが刻明に描かれている。

死後ビュルフトノォスは臣下ゴドリク一味の裏切りに遭っている。主君が敵の刃の前に斃れるや，ゴドリクは主君の馬に跳び乗り，兄弟のゴドウィネとゴドウィイらと踵を返して森の砦への逃れ去った。常に名誉を重ん

じた古代ゲルマン武人にとって，主君の斃れた戦場を背にし逃亡することは不名誉の極みであったのである。正しく『ゲルマーニア』(十四) で示された恥辱の最たる行為を彼らは実行したのだ。年若きエルフウィネは，酒宴の席で誇示した武勇伝を今こそ試そうと言い，「今やわが主君，戦に斬倒され横たはり給ひけるからには，我がこの戦より故郷へ赴かむと望めりとて，かの国にて上士等我を責むることなからしめむ。そは我に取りて痛手の最たるものなり。彼は我が親族たりしと共に又我が主君に在はしき」と残留の決意を述べるのだった。また忠実な臣下の一人オッファはしなの木の槍を振り，鼓舞激励しつつ決戦の覚悟を語った後で，語気強くこう彼らの振舞いを責めつけた——「オッダの卑劣なる一子，ゴドリクは我等すべてを裏切りぬ。彼が馬，かの誇らかなる駒にうち跨り行きし時には，あまりにも多くの人々何れもそが我等の主君なりと思ひき。この故に此処，戦場にて軍勢は離散し楯の列は崩されけるなり。此処にて彼が斯くも多くの者を何れも奔らしめたる彼の所行に禍あれ！」彼らの言葉には，『ベーオルフ』に於けるベーオウルフの血族ウィイラーフを聴く思いがする——

今やイエアタスの王となったベーオウルフは，国土を荒す火竜を退治せんと，十一人の家臣を従え，一人の奴僕を案内人として火竜の住む洞窟に赴いた。そこで激怒せる火竜を見るや，家臣らは恐怖の余り主君を見棄て森の中へ逃げ込んだ。しかし，ウィイラーフだけは危険に曝されながら単身戦う主君を見て大いに恥じ，直ちに引返して主君と共に火竜を斃した。だが，王自らも全身深傷を負い絶命する。ウィイラーフは主君を見殺しにした武人らを叱責し，こう言うのだった——「貴人等遠くより汝等の逃亡，不名誉なる行を聞きてよりは，その一族の人々何れも土地の権を奪われて彷徨はざるべからざるなり。武士等の何れに取りても恥の生よりは寧ろ死の方良きなり。」命を護るために一族にも及ぶ不名誉，裏切りを採るか，名誉・忠誠のために命を棄てるかの選択である。ゴドリク一味は前者を取った。だが，他の心ある臣下達は名誉をかち得んと心怯まず戦い，戦う主君を防護した。主君の命果てた後も彼らは互に励し合い，主君の仇に報復せんと一歩たりとも退きはしなかった。「彼等総ては命を棄つるか慕はし

き君の仇に報ゆるか，二つに一つを望みしなり」――この武人たるの気骨は，彼ら各人の行為と内面を如実に写し出すことによって我々の胸に迫り，恰もその激しき息使いに触れる思いがする。レオフスヌは言った――「我は，我がここより一歩たりとも逃ることを思はず，否いよいよ進みて闘いにわが主君の仇を報ひむと望めることを誓ふものぞ。今やわが君斃れ給ひけるからには，かれ主なくして戦より踵を返し故郷へ赴くとて，心中ゆるがざる武士らスツルメレのほとりにて言葉もて我を咎むるの要なかるべし。否，武器，切先と鋼に此身を奪はしめむ。」また老いたる歩卒ドゥンネレは槍を振り，「軍中にて殿の仇を報ぜむと思う者はつゆためらふべからず，又（己が）命を気遣ふべからず」と叫んだ。猛々しき武人らの雄叫びが続き，死が続いた。軈て戦力衰えかけた頃，老いたる家臣ビュルフトウォルドは雄々しく訓へて言った。切り出しの言葉は，ゲルマン武人精神を全うすることによって到達する逆説である――「我らの力衰ふるにつれて所存はいよいよ固く，胸はいやましに雄々しく，勇気はいやまさりて大いならざるべからず。此処に我等のよき主君は全く斬倒されて砂上に横たはり給ふ。今この戦闘より去り行かむと思ふ者は，永久に嘆くことならむ。我は年老ひたり。逃れむことを我は思はず。否わが主君の傍に，かくも慕はしき御方の近くに斃れむこそ思へ。」そしてまた槍が飛び交い，武具が触れ合って死が続いた。――

こうした姿は彼らの忠誠と血族による絆であり，正しく古代ゲルマン武人の魂であった。ゲルマン武人精神に於て，武勇と名誉そして忠誠心がどれ程大切であったか測り知れない。この精神は時旧りて猶，人々の胸に躍々と脈打ち，その気魄溢れる英雄はアングロ＝サクソンのスコォプによって描き出された。「腕に覚えあるものは死に先んじて誉を得むと努むることこそよけれ」とフローズガール王に語ったベーオウルフは，年若き頃，生きている間は誉を堕ちしむることはすまいと漏し，実際雄々しき武勇を顕わして誉を求めたのであった。更には，食人種メルメドニア人に捕われた聖マタイを救い，彼らの間にキリスト教を布教した使徒アンドレアスの伝説を歌った宗教詩『アンドレーアス』の中にさえ，ゲルマン武人の忠誠の

精神は浸潤していたのである。神の命によって，アンドレアスと従者達は一叟の小舟を漕ぎ出しメルメドニアへ向う。その舟の舟頭は姿を変えたキリストである。キリストの勧めで，従者達は陸に上ってアンドレアスの帰国を待てと言われるが，耳を貸さずこう答える——「もしわれら君を見棄てたらむときは，われら主君もなく，心悲しく，幸をうばはれ，罪に心傷きて，いづこかへ赴かむ。手と楯，戦場にて刃に斬りさいなまれ，戦の際残虐を忍びしとき，何人が戦にて最もよく常に主君を助け奉りしかと，雄々しき人々の子ら評定いたすとき，われらはいづれの土地にても人々に蔑まれ憎まるゝこととならむ。」[21] 戦場で主君を見棄てることは，ゲルマン武人の最大の恥辱であり，その不名誉は当人のみならず一族にも及び，いずれも土地の権を奪われて彷徨わなければならない。このことはウィイラーフやエルフウィネが語る精神と寸分違うところがない。ゲルマン武人の君臣関係の倫理を聖者と従者との関係にまで当嵌めているのである。宗教詩に於てさえこの精神の発現を見る時，それに対して当時のアングロ＝サクソン人が如何に深い共感を寄せていたかが偲ばれよう。

そして更に時代が下り，暗澹たるイングランドの一角モオルドンに於いて，主君ビュルフトノォスと彼の臣下達の間に，その精神は粲然と煌めいていたのだった。タキトス流に言えば，ビュルフトノォスは勝利のために戦い，その忠実な臣下らはビュルフトノォスのために戦ったのである。

（4） ここで再び当時の歴史に立ち戻り，詩人の内面への接近を試みる必要がある——

『モオルドンの戦』は，古代ゲルマン人の倫理観を抱くイギリス武人の気慨を余すところなく描いた絵屏風であった。しかし，中にはゴドリクのように平然と主君を裏切る者もいた。この詩に於けるデイン人の勝利とゴドリクの裏切りから，エセルレッド治世のイギリス，取分け武人・王・貴族階級の低迷を垣間見ることができる。老太守ビュルフトノォスはデイン人の貢物請求を毅然として拒絶した。しかし，時の王エセルレッドとその重臣は，貢納をもって平和を買うを最良の策と考え，丁度この年，「最初の貢」を納めたのだった。それが一時凌ぎに過ぎぬことは言うまでもない。

海賊デイン人らは貢物を得て一旦は退却するものの，時を移さずして再び侵入し，掠奪の限りを尽すのだった。九九一年以後の『年代記』の記事には，賊匪の前に荒廃の場と化して行くイングランドの惨然たる光景が後を絶たない。

その渦中にあって，イギリス武人は如何にして彼らに反攻したか。例えば『年代記（B)』九九八年の記事はこう伝えている——「屢々軍は召集せられ，彼ら（デイン人）に相対峙したりき。されど戦正に始まらむとするに，出さる司令は退却なりき。斯くして，勝利納めしは常に敵軍なり。」気根喪失したイギリス人は戦っては敗れ，敗れては貢で和を請い，甚しきは戦わずして逃亡する有様であった。『年代記』の筆者は，時には，怯懼なイギリス軍に対し冷笑的ですらあった。

勿論，主君に対する裏切りも相次いで起る。モオルドンの敗戦の翌年九九二年に，エセルレッド王復心の重鎮エルフリックの裏切りがあり，更に翌年の『年代記』はこう記述している——「この年，ベバンブルフは破壊せられ，夥しき掠奪を許しぬ。それより時経ずして敵軍フムブラ(ハムバ)河口に侵入し，その地リンデシィ（リンズィ）とノルスヒュムブラ（ノーサムブリア）両地にて猖獗の限りを尽しぬ。而して大軍召集せられしなり。されど開戦せむとするに，指揮官ら先ず逃亡の手本を示しぬ。そはフレナ，ゴドウィネ，フリゼイストなり。」

ゴドリクの逃亡は当時にあっては，極く有触れたものであったのだ。国家存亡の機にあって最も心堅固に民を導くべく武人・王・貴族階級にして，斯くの如きであったのである。『モオドンの戦』で歌い上げられた，武勇に優れ人に範たる武将と勇敢にして忠誠心忘れぬ武人との絆，あの古くからイギリス武人の骨肉に滲透していた武人精神は，モオルドンの敗戦を最後に何処へともなく消え失せてしまったのである。だが，『モオルドンの戦』の詩人は武将ビュルフトノォスをして，時の怠惰王エセルレッドを「我が主君」と呼ばしめ，またビュルフトノォスを「エゼルレェドの身分貴き上士」，「エゼルレェドの太守」と呼んで，古来の君臣関係を崩したりするようなことはしなかった。混乱せる世相を背にしながら，武士達の

気高い精神をまのあたりに示すことによって，彼は正に暗黒の歴史に絶え入らんとする灯を育み続けたのだった。

## III.

（1）『モオルドンの戦』の詩人が伝統的英詩法に精通した学識ある者であったことは明らかである。詩の精神ばかりではなく，語句の用法・表現方法・詩法・技術が前期の古代英語詩と共通するところが多い。その点に関しては『ブルナンブルフの戦』についても同様である。しかし，両者の詩風は，題材内容の異質性に加えて，各々相応な描写法を駆使することによって，その差異が歴然たるものになった。古代英語も後期になると，伝統的頭韻詩法から外れた新しい詩形と表現法が現われ始めていた。『モオルドンの戦』にも斬新な色取りがある。だが，『年代記』に挿入された史詩に比べれば，それは依然として古風な装いであった。伝統的頭韻詩法の傘下で，独自の描写法をとったと見るべきである。最後に，『モオルドンの戦』の詩人があの武人精神を如何に描いたか[22]を概観し，結びへと急がねばならない——

かの『ベーオウルフ』は「脱線」に富み，苛酷な自然を写し出し，幾多の人生の哲理を漏し，荘重にして絢爛たる文体によって一大壮観を呈している。これに対して，この詩は簡潔をもって多くを語っていると言えよう。詩人は焦点を絞り，速かに情景を移しながら詩作意図を効果的に充足してゆく。従って，時には厳密な頭韻詩法の原則に悖り，放縦になることさえ厭わなかった。また，アングロ＝サクソンのスコォプは，屢々独特のノミックな表現をして，人生の哲理を示すことがあった。だが，『モオルドンの戦』の詩人は，自らの言葉としては唯一度，ゴドリク逃亡に際して「そは正しきことにはあらざりき[23]」と付言しただけであった。詩人の固い胸から零れた言葉である。彼の視点は専ら，武人各人が激戦に臨み，如何なる考えのもとに如何なる行為を成すかに注がれていた。彼はひたすら武人の姿を写し，彼らの内面を刻明に描き出した。現存部分三二五行中，イギリス武人の語る雄々しき言葉には，ハーフ＝ラインにして一四三行も費

していることをみても，それは明らかである。ビュルフトノォスは勿論，他の登場人物も恐らく実在の人物であった。その多くは詩人と知己の間柄であったと推測されるほどである。しかし，ここに描かれた仔細な描写も登場人物の言葉も，彼の創作であることは言うまでもない。彼は自己の内面を武人達の言動に託したのであった。戦の勝敗は，彼にとって然程問題ではなかった。

（2） 恥辱を知り名誉をかち得んとする勇敢なる武人の群，優れた武将と忠誠心・復讐心を忘れぬ君臣関係の理想，血族間の堅固な絆――『ベーオウルフ』，『ワルデレ』，『フィンズブルフの戦』と，主として古代英語英雄詩に歌い上げられたこの古代ゲルマン武人精神が，詩の表現形式とともに十世紀末に至るまで保存され，当時の混沌とした時代に一輪の花を結んだことは確かに不思議なことである。だが，更にそれが然乍ら目撃者の如き筆致で描かれている事実を加味すると，このことが却って，ビュルフトノォスと臣下達の壮烈な死が，仮に戦直後の作ではないとしても，この作品に触れる人々の胸に，歴史的意義を伴って，深い感動を誘っていたと推定する拠所ともなり，また詩人の内面に肉迫する糸口ともなるのである。

『ベーオウルフ』を見てみよう。それは枝葉豊かな巨木の観を呈し，そして多分に英雄詩の体裁を整えてはいるにしても，全体は絶妙なコントラストによって統一構成され，その終局に於ては悲劇性を醸し出しているのである。例えば，若武者ベーオウルフと老王ベーオウルフを比較してみればいい。「人生は儚い」[24]ものなのだ。通常「真のエピック」[25]と看做される『ベーオウル』も，行きつく処は悲劇であり，『ワルデレ』と『フィンズブルフの戦』が断章に過ぎぬとなれば，『モオルドンの戦』が現存する古代英語詩中正しく唯一の英雄詩だとするゴードンの見解は必ずしも否定できない。[26] しかし，仮にそれらが過不足なく英雄詩の姿を留めていたとしても，各々の詩人には，『モオルドンの戦』の詩人が背負っていた肩の重みを感ずることはなかった筈である。歴史は流れていたのだ。我々はその史的背景を踏まえた上で，この詩に接する必要があるだろう。

詩人の心は，十世紀の佳き時代に，整然とした疑古体を駆使し，戦勝を

讃歌した『ブルナンブルフの戦』の作者のそれとも異っていた。況んや，修道僧の興味から，勝利者ビュルフトノォスの理想像を伝えんとした『エリ教会史』の筆者とは比較にならない。寧ろ，共に混乱の時代を背にした『年代記』の筆者や，あの激烈なるルプスに通ずるものがあったであろう。『年代記』の筆者は，「最初の頁」の屈辱を伝える前に，太守ビュルフトノォス殺害の記事を唯さりげなく併置し，ルプスは，時代の悪を神の怒りのあらわれとしてとらえ，僧侶の精神から悲憤慷慨剝出しにイギリスの惨状を国民に訴えた。『モオルドンの戦』の詩人は心の内を露わにせず，敬神の念が添うた古代ゲルマン武人精神をひたすら讃美し，伝統的詩風の中にも新鮮で嫋かな音色を湛えることによって，うなじ傾ける人の胸に決して余韻消えやらぬ高潔なしらべを奏でたのであった。彼のは詩人の精神だった。

～『モオルドンの戦』の歌（第一部）～　おわり

（昭和四十四年　立秋）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

NOTES

1) W. P. Ker, *The Medieval English Literature*, Oxford, 1912. reprinted 1955; E. V. Gordon (ed.), *The Battle of Maldon*, Methuen, 1937, reprinted, 1957; J. E. Cross, 'Oswald and Byrhtnoth,' *English Studies*, 46, 1965; M. J. Swanton, '*The Battle of Maldon*: A Literary Caveat,' *J. E. G. P.* 67, 1968.

J. B. Bessinger, '*Maldon and the Óláfsdrápa*: An Historical Caveat,' *Comparative Literature*, 14, 1962; B. F. Huppe, D*octrine and Poetry*, Albany, 1959; M. W. Bloomfield, 'Patristics and Old English Literature: Notes on Some Poems, *Comparative Literature*, 14, 1962; R. W. V. Elliott, 'Byrhtnoth and Hildebrand: A Study in Heroic Technique,' *ibid.*

2) 他の多くの詩と同様，原詩には標題がついていない。J. J. Conybeare, *Illustrations of Anglo-Saxon Poetry*, London, 1826, edited by W. D. Conybeare, New York, 1964, pp. lxxxvi-xcvi に於て，この詩は 'The Death of Byrhtnoth' と呼ばれている。ten Brink をはじめ，ドイツの学者の多くはこの標題を用いている。

小論で使用したテクストは，主として次の通りである——W. J. Sedgefield, *The Battle of Maldon*, Boston, 1904. E. V. K. Dobbie, *The Anglo-Saxon Minor Poems*, New York, 1952. *Bright's Anglo-Saxon Reader*, revised and enlarged by J. R. Hulbert, New York, 1953. *Sweet's Anglo-Saxon Reader*, revised by C. T. Onions, Oxford, 1959. E. V. Gordon, *The Battle of Maldon*, London, 1954.

また，訳文については，厨川文夫教授，「〝モオルドンの戦〟の歌」，『史学』第16巻，第4号，1938, pp. 50-61に納められた翻訳を使用させて戴いた。

3) Brunanburh の位置については定説がない。この問題に関する議論は Earle-Plummer, *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, II, Oxford, 1892, reprinted 1952, p. 140. を参照。

4) Cf. E. V. Gordon, *op. cit.*, pp. 34-37.

5) ビュルフトノォスの死に続くゴドリクの裏切りを中心にして，前部と後部に分けて考えることが多い。Cf. E. E. Wardale, *Chapters on Old English Literature*, London, 1935, reprinted 1965, p. 224. S. B. Greenfield, *A Critical History of Old English Literature*, New York, 1965, p. 100. 等参照。

6) *The Anglo-Saxon Chronicles* では 'Danes' (OE. 'Dene') と 'Northmen' (OE. 'Norðmenn') とが区別されていない。九九一年に襲来したのは，北欧の詩 sagas にその名を謳われた Olaf Tryggvason に率いられた Norway の軍勢だと考えられている。Olaf Tryggvason と The Battle of Maldon に関しては Gordon, *op. cit.*, pp. 10-15. を参照。

7) 'Bricg' (11. 74, 78) と 'ford' (11. 81, 88) の意味については，Gordon, *op. cit.*, pp. 2-3. 参照。

8) Cf. R. W. Chambers, *Man's Unconquerable Mind*, London, 1939, reprinted 1955, p. 83.

9) 'þonne astigeþ blodig wolcen mycel from norþdæle' Cf. *Blickling Homelies*, ed. R. Morris, E. E. T. S. p. 91. Cf. 厨川教授，*op. cit.*, pp. 31-39.

10) Cf. *The Cambridge History of English Literature*, I, p. 115.

11) 実際にはそれよりも遥かに多く，金銀併せて二万二千ポンドに達したと言う。

12) 尾藤充 助教授，'*Sermo Lupi ad Anglos* と *The Battle of Maldon* について'，『慶応義塾創立百年記念論文集』1958. に全訳が納められている。

13) MS. A だけが Maldon の戦を 993 年の項に置いている。これは 991 年と 994 年の事件を混同したためである。Cf. Earle-Plummer, *op. cit.*, II, p. 173.

14) 古代英語詩の復興と『年代記』に於ける史詩に関しては，C. L. Wrenn, *A Study of Old English Literature*, London, 1967, p. 182. 参照。

15) Cf. *Ten Brink's English Literature* translated by H. M. Kennedy, London,

1914, p. 92.

16) Cf. Gordon, *op. cit.*, p. 23.

17) Cf.R. H. Hodgkin, *A History of the Anglo-Saxon*, I, Oxford, 1959, pp. 210–211; H. M. Chadwick, *The Heoric Age*, Cambridge, 1967, pp. 344–365.

18) 書名は各々 *Vita Sancti Oswaldi. Historia Ramesiensis*, cap. LXXXI: "De Brithno Comite." *Historia ecclesiæ Eliensis*, Lib, II, cap. VI. 後二者の歴史に於ける作為については, E. A. Freeman, *The History of the Norman Conquest of England*, I, Oxford, 1870, p. 624. W. J. Sedgefield, *op. cit.*, pp. xii–xiii. 参照。

19) Cf. Gordon, *op cit.*, p. xii.

20) Wardale は *The Battle of Maldon* と *Beowulf* を比較して, 'It (*i. e. The Battle of Maldon*) is as warlike in spirit as Beowulf; .....But Christian teaching has penetrated much deeper.' と述べている。Cf. Wardale, *op. cit.*, p. 225.

21) 厨川教授,『中世の英文学と英語』pp. 94–95.

22) この項目は, 昭和四十三年度慶応義塾学事振興資金による,『古代英語詩の言語的研究』の調査結果の一端です。

23) 'þe hit riht ne wæs,' (1. 190 b) Gordon はこの構文を elliptical と言い, þe を関係代名詞 hit を非人称 (See 11. 60, 195) としている。A. J. Wyatt は þe hit を compound relative に解し, 可能な訳文として 'which was not right' を添えている (Cf. *Anglo-Saxon Reader*, Cambridge, 1962, p. 281).

24) OE. 'lif is læne.' Cf. 'hæfde æghwæðer ende gefered / *lænan lifes*.' (*Beowulf* ll. 2844 a–2845 a).

25) 'a true epic poem' Cf. W. P. Ker, *op. cit.* p. 26.

26) Cf. Gordon, *op. cit.*, p. 24.

* 次回は<第二部>その宗教性と詩人の内面——を予定。

APPENDIX.

小論に於ける引用文の原文とそのテクストは次の通りである——

J. Earle and C. Plummer, *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, Oxford, 1952.

D. Bethurum, *The Homelies of Wulfstan*, Oxford, 1957.

J. G. C. Anderson, *Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, Oxford, 1938.

E. V. K. Dobbie, *The Anglo-Saxon Minor Poems*, New York, 1958.

Fr. Klaeber, *Beowulf and the Fight at Finnsburg*, Boston, 1950.

G. P. Krapp, *The Vercelli Book*, New York, 1961.

J. Raine, *Vita Oswaldi* in *Historians of the Church of York and its Archbishop*, Rolls Series.

I 「これと同じ年，火に似たる血色の雲……」

Þy ilcan geare wæs gesewen blodig wolcen on oft siðas on fyres gelicnesse *and pœt* wæs swyþost on middeniht oþywed. *and* swa on mistlice beamas wæs gehiwod. þonne hit dagian wolde. þon*ne* toglad. hit.—*The Ango-Saxon Chronicle*, MS. C. Cotton Tiberius B. i. anno 979.

「今や永らく内にも外にも……」

Ne dohte hit nu lange inne ne ute, ac wæs here *and* hete on gewelhwilcan ende oft *and* gelome, and Engle nu lange eal sigelease *and* to swiyþ geyrde þurh Godes yrre, *and* flotmen swa strange þurh Godes þafunge þæt oft on gefeohte an feseð tyne *and* hwilum læs, hwilum ma, eal for urum synnm,—*Sermo Lupi ad Anglos quando Dani maxime persecuti sunt eos, quod fuit dies* (*sic*) *Æpelredi r*egis.

「されどそのこと起るまで」

……, þær he on locað þe læt hine sylfne rancne *and* ricne *and* genoh godne ær þæt gewurde.—*MSS EI Sermo Lupi ad Anglos.*

「然れども我等が屢々……」

Ac ealne þæne bysmor þe we oft þoliað we gyldað mid weorðscipe þam þe us scendað. We him gyldað singallice, *and* hy us hynað dæghwamlice. Hy hergiað *and* bærndað, rypað *and* reafiað *and* to scipe lædað; *and* la, hwæt is ænig oðer on eallum þarm gelimpum butan Godes yrre ofer þas þeode, swutol *and* gesæne?—*MSS EI Sermo Lupi ad Anglos.*

「この年イプスウィチは掠奪せられ，……」

Her wæs G(ypes)wic gehergod, *and* æfter þam swiðe raðe wæs Brihtnoð ealdorman ofslægen æt Mældune. *and* on þam geare man gerædde *pœt* man geald ærest gafol Deniscan mannu*m*. for þam mycclan brogan þe hi worhtan be þam særiman. þæt wæs ærest .x. þusend punda. þæne ræd gerædde Siric arceb*iceop*.—*The Anglo-Saxon Chronicle*, MS. E, anno 991.

II 「……，（ゲルマン人は）統率者を選ぶのに……」

(Reges ex nobilitate), duces ex virtute sumunt. (nec regibus infinita aut libera potestas), et duces exemplo potius quam imperio, si prompti, si conspicui, si ante aceim agant, admiratione praesunt.—

Tacitus, *Germania* 7. *Parentheses are mine.

「戦場に臨んだ時，……」

Cum ventum in aciem, turpe principi virtute vinci, turpe comitatui virtutem principis non adaequare. iam vero infame in omnem vitam ac probrosum superstitem principi suo ex acie recessisse: illum defendere, tueri, sua quoque fortia facta gloriae eius adsignare praecipuum sacramentum est: principes pro victoria pugnant, comits pro principe. —*Germania* 14.

「ビュルフトノォスは斃れ……」

....., et Byrihtnothus cecidit, et reliqui fugerunt. Dani quoque mirabiriter sunt vulnerati, qui vix suas constituere naves poterant hominibus.—*Vita Oswaldi.*

「汝等にはさまで易々と……」

"Ne sceole ge swa softe sinc gegangan;
us sceal ord and ecg ær geseman,
grim guðplega, ær we gofol syllon."
—*The Battle of Maldon*, 11. 59-61.

「うぬぼれたる心の故に」

for his overmode—*Ibid.*, 1. 89.

「ビュルフトノォスは彼らを励まし……」

.....; stihte hi Byrhtnoð,
bæd þæt hyssa gehwylc hogode to wige
þe on Denon wolde dom gefeohtan. —*Ibid.*, 11. 127-129.

「此の国，エゼルレェドの国，……」

..... eþel þysne,
Æþelredes eard, ealdres mines,
folc and foldan. —*Ibid.*, 11. 52 b-54 b.

「人々を統べ給う君（神）よ。……」

"Geþancie þe, ðeoda waldend,
ealra þæra wynna þe ic on worulde gebad." —*Ibid.*, 11. 173-174.

「今やわが主君，……」

"Ne sceolon me on þære þeode þegenas ætwitan
þæt ic of ðisse fyrde feran wille,
eard gesecan, nu min ealdor ligeð
forheawen æt hilde. Me is þæt heama mæst;
he wæs ægðer min mæg and min hlaford." —*Ibid.*, 11. 220-224.

「オッタの卑劣なる一子，……」

"Us Godric hæfð,
earh Oddan bearn. ealle beswicene.
Wende þæs formoni man, þa he on meare rad,
on wlancan þam wicge, þæt wære hit ure hlaford;
forþan wearð her on felda folc totwæmed,
scyldburh tobrocen. Abreoðe his angin,
þæt he her swa manigne man aflymde!" —*Ibid.*, 11. 237 b—243 a.

「貴人等遠くより……」

"londrihtes mot
þære mægburge monna æghwylc
idel hweorfan, syððan æðelingas
feorran gefricgean fleam eowerne,
domleasan dæd. Deað bið sella
eorla gehwylcum þonne edwitlif!" —*Beowulf*, 11. 2886 b-2891.

「彼等総ては……」

hi woldon þa ealle oðer twega,
lif forlætan oðde leofne gewrecan.
—*The Battle of Maldon*, 11. 208-209.

「我は，我がここより一歩たりとも……」

"Ic þæt gehate, þæt ic heonon nelle
fleon fotes trym, ac wille furðor gan,
wrecan on gewinne minne winedrihten.
Ne þurfon me embe Sturmere stedefæste hælæð
wordum ætwitan, nu min wine gecranc,
þæt ic hlafordleas ham siðie,
sende fram wige, ac me sceal wæpen niman,
ord and iren." —*Ibid.*, 11. 246 a-253 b.

「軍中にて殿の仇を報ぜむと思う者は……」

"Ne mæg na wandian se þe wreccan þenceð
frean on folce, ne for feore murnan." —*Ibid.*, 11. 258-259.

「我らの力衰ふるにつれて」

"Hige sceal þe heardra, heorte þe cenre,
mod sceal þe mare, þe ure mægen lytlað.
Her lið ure ealdor eall forheawen,
god on greote. A mæg gnornian
se ðe nu fram þis wigplegan wendan þenceð
Ic eom frod feores; fram ic ne wille,

ac ic me be healfe minum hlaforde,
be swa leofan men, licgan þence." —*Ibid.*, 11. 312–319.

「腕に覚えある者は……」

wyrce se þe mote
domes ær deaþe; —*Beowulf*, 11. 1387 b–1388 a.

「もしわれら君を見棄てたらむときは……」

"Hwider hweorfað we hlafordlease,
geomormode, gode orfeorme,
synnum wunde, gif we swicað þe?
We bioð laðe on landa gehwam,
folcum fracoðe, þonne fira bearn,
ellenrofe, æht besittaþ,
hwylc hira selost symle gelæste
hlaforde æt hilde, þonne hand ond rond
on beaduwange billum forgrunden
æt niðplegan nearu þrowedon." —*Andreas*, 11. 405–414.

III 「屢々軍は召集せられ，……」

*and* man oft fyrde ongean hi gegaderode. ac sona swa hi togædere gan sceoldan. þonne wearð þær æfre þurh sumþing fleam astiht. *and* æfre hi æt ende sige ahton.—*The Anglo-Saxon Chronicle*, MS. E, anno 998.

「この年，ベバンブルフは破壊せられ，……」

Her on ðissum geare wæs Bæbbanburh tobrocon *and* mycel herehuðe þær genumen, *and* æft*er* þam com to Humbran muðe se here. *and* þær mycel yfel gewrohtan ægðer ge on Lindesige ge on Norðhymbran. þa gegaderode man swiðe þa heretogan ærest þone fleam. *þæt* wæs Fræna. *and* Godwine. *and* Friðegist.—*The Anglo-Saxon Chronicle*, MS. E, anno 993.

「我が主君」

ealdres mines (genitive),

「エゼルレッドの身分貴き上士」

ðone æþelan Æþelredes þegn (accusative),

「エゼルレッドの太守」

Æþelredes eorl (nominative)